

# ペルソナ3 面倒事が嫌いな化け物オリ主

ワンダラー

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

ペルソナ3の世界に化け物転生者のオリ主がいたら？

仮面ライダーの執筆が中々上手くいかずにこんな物を書いてしまいました。

尚、私のメンタルは豆腐よりも柔らかい消しゴムのカスみたいなもので批判はご遠慮下さい

# 目次

中学時代	
プロローグ	化け物オリ主
1	
第1話	ご令嬢にはご用心? (前)
6	
第1話	ご令嬢にはご用心? (後)
17	
オリ主設定	
23	
第2話	レッツ!タルタロス! (前)
27	
第2話	レッツ!タルタロス! (中)
34	
第2話	レッツ!タルタロス! (下)
40	
第3話	夢の中でのアクショント
49	
主人公のペルソナ設定・オマケ	
56	
第4話	修吾の目覚め
62	



# 中学時代

## プロローグ

## 化け物オリ主

「んおっ!?もう12時になんのか」

小腹が空いたため、ちよつと近くのコンビニに買い物しようと思ひ外に出たらあと三分で0時になるところだった。

「しかし、中学生が夜中に出てるのに警察も何も言わないとか大丈夫なのか、巖戸台? ……まあ中の人は40越えたおっさんだけど」

そう、俺は俗に言う転生者と呼ばれる存在だ。

名前は終　修吾。今は中学2年の14だけど前世では30のオッサンだった。

心臓発作でポックリ逝つちまったけどな……………。

別に二次創作みたいに神様にあつたとかそんな展開はなかつたとは思うんだけど、何故か前の記憶と有り得ない位、というか化け物クラスの身体能力が備わつてたんだからさあ大変!

俺を生んだ両親は俺を気味悪がつて俺を捨てた。

まあそれも無理ないかもしれないけどな、普通なら。

けど、俺を拾ってくれた義父母夫婦はそんな俺を育ててくれた。

あんどきはすげえ嬉しかったなあ……………。

けど、そんな俺を育ててくれた義父母も去年、交通事故で亡くなった……………。

その時の事は今でもよく覚えてる。

あの時はマジでガチ泣きした……………。

義父母の一族は金の亡者と言わんばかりに卑しい奴等だった。

俺の引き取りをどうするだとかの事なんざそつちのけ。

義父母の死よりも遺産相続の事ばかりだ。

まあ少々頭に來たので色々と肉体言語という会話と世間様に顔向けできない悪事をマスコミに匿名でタレ込んだら一部の親族は今頃はオリのなかだろうけどな

取り敢えずそれが済んでからは、ある程度の遺産を俺が貰い受け、巖戸台にある寮付の学校に転校してきたわけだ。

それがまさか、前世でやったゲーム「ペルソナ3」の舞台だとは思わなかったけどな

……………。

別に介入とかそんなのには別に興味無いから基本的には静観しようと思ったんだけど……………。

「影時間適正があるとか、ホント無いわあ」

今、丁度買物物を済ませて会計をしようとしたら0時になってしまい、目の前にいた店員さんが棺のオブジェになった。

「……………これで商品とか持ってかれたら万引きの餌食だよなあ……………なあ、そののシヤドウ君？」

後ろを振り向くと、そこには黒く濁った影が数体現れた。

ご丁寧に仮面のような物まで持ってらっしゃる。

「はあ……………面倒事は御免なだけだなあ……………」

俺はボヤきつつ、近くにあった硬貨の詰まった募金箱を掴んで……………。

ブンツッ！ゴシヤアツ！

そのままシャドウに投げ付けた！

募金箱に当たったシャドウは千切れ飛び、霧散した。

「さて、と……さっさと帰ってか○あげ○ん食べたいんでな」

手っ取り早く終わらせてもらうぜ？

## N O s i d e

「全く、要らん手間かけさせてからに……」

修吾の回りにはオブジェがある以外は何も残っていないかった。

彼はその言葉通り、シャドウ相手に無傷かつ物の数秒で事態を終息させたのである。

「さて、そんじゃ帰るかな」

彼は募金箱を戻してそのまま意気揚々としてビニール袋片手に帰路に着いた。



背後に追跡する赤い影に気付かないまま……。

# 第1話 ご令嬢にはご用心?(前)

N O s i d e

昨夜の出来事から明けて、修吾は学園の教室で机に突っ伏して微睡んでいた。

「(あゝ……………こないいい天気なのに授業とかかつたりい……………サボろつかなあ)」

……………考えている事はまんまダメ人間の思考ではあるが……………

「おい、シユウ?何かいつも以上にダルそうぞ?」

そこへ話し掛けてきたのは隣の席で修吾の友人である「荒垣進次郎」である。

修吾と進次郎の出会い是一年生の時に遡る。

進次郎は趣味の料理で使う食材の買物最中、路地裏にたむろっている奴等に絡まれて逆に伸ばしてしまい、仲間を引き連れられて困っていたところを修吾が助けに入り(勝手に乱入)助けられて以来、付き合いがあった。

……………余談ではあるが、修吾はその時虫の居所が悪く、修吾に絡んできた相手は全治三ヶ月の上に精神を病んでしまったとか……………。

「ん……………ああ、こないにいい天気なのに眠いだけだから」

「ふうん……………つかお前、普段から眠そうじゃねえか」

「…………知らないなあ、そんなことは」

そんな他愛もないやり取りをしている時の事だった…………。

「すまない、ここに終　修吾はいるか？」

教室の入り口から修吾を探す声が聞こえた。

「おい、シユウ？あれって桐条じゃねえか？」

「…………ガツキー、俺は寝てるって言つといて」

「ガツキーって言うんじゃねえよ…………その様子だと、何か面倒事か？あ…………」

進次郎は修吾の様子を見てそう予想した。

修吾は何かと面倒事に巻き込まれる習性があった。

一年近くの付き合いだが、進次郎もその面倒事に多少なりとも巻き込まれる事があった。

進次郎自身も慣れてしまったようだが…………。

「けど、もう遅いみたいだぜ？」

「……………うわあ」

心底めんどくさそうにボヤきつつ、顔を上げると修吾を見つけてツカツカと近づく存在がいた。

そこにいたのは赤い髪に容姿端麗でいて、見るものを引き寄せるカリスマ性を持つ女

子がいた。

彼女の名は「桐条美鶴」

月光館学園中等部2年であり、修吾や進次郎と同級生である。

「すまない、君が終　修吾か？」

「……………何か用か、桐条？」

顔にデカデカと面倒臭さを表し、対応する修吾に対してクラスメートの反応は……………  
?

「お、おい！桐条さんが終に何の用なんだろうな？」

「ああ、同学年でトップの成績の桐条とかたや同学年で面倒臭がりナンバーワンの終だぜ？接点が見つからねえよ」

「あ、でもでも終くんってやるときはやるタイプだから人気高いのよ？」

等々、悪くない反応なのだが如何せん修吾はそれを聞いて尚、面倒臭さを濃くした。

「(ま、こいつは面倒臭がりだけど基本的にはお節介かつお人好しだからなあ)」

隣にいた進次郎は周りの反応を聞きつつ内心で苦笑していた。

「ああ、すまない……………話したい事がある。」

放課後、時間を取れないか？」

そんな周りの反応を気にしていないのか、桐条は修吾にそう告げた。そんな事を言えば大騒ぎになること必至である。

「おおっ！あの女帝と言われている桐条が終に告白かつ!？」

それを聞いて盛り上がるクラスメートだが、修吾はただ淡々としていた。

「悪いけど、放課後は用事があるから無理だな」

実際には用はない。

帰りに進次郎と別のクラスの人間とラーメンでも食って帰るだけなのだから。

「そうか……………なら都合のいい日があったら教えてくれ」

残念そうに言い残して桐条はそのまま教室を出ていった。

「相変わらずのオーラだな、桐条は……………しかし、桐条の話したい事って何なんだろうな？」

「……………大方、あの事じゃないか？」

事のなり行きを見守っていた進次郎は修吾に問いかけたが、修吾のあの事と言うのを聞いて顔をしかめた。

実は進次郎は何度か影時間に遭遇している。

修吾程身体能力は高くはないが、進次郎もそれなりに身体能力は高い。

近くにあったバス停の標識を持ってシャドウを薙ぎ払って事なきを得たのである。

「あの、訳のわからねえ時間のことか……桐条が何でそれを知ってるんだろうな」

「さあてね……別に興味無いし……(本当は影時間の大元の原因は桐条家なのは知ってるけどな)」

面倒臭さを再び出し、そのまま修吾は机に突っ伏した。

そして、そのまま静かに寝息をたてた。

「相変わらず寝るの早えな……の○太か、お前」

進次郎のそんな突っ込みは空に霧散していった……。

そして放課後……………。

「ん〜♪よく寝たあ」

「つたく、今日丸一日寝てやがったなあ……………こんなんで成績上位だから世の中間違つてる気がするぜ」

身体を解しつつ、上機嫌な修吾とそれを見て不可解にボヤク進次郎。

と、そこに……………。

「おい、シュウ！シンジ！」

二人に呼び掛ける一人の男子生徒がいた。

長身で整った顔つきをしており、肉体も引き締まったその生徒はそのまま二人に近付いてきた。

「おおく肉彦じゃん！出迎えごくろうさん♪」

「その呼び方止めろ、シュウ！」

「アキ、牛井にプロテインかけて食う奴が言っても説得力ねえぞ」

彼の名は「真田 明彦」

進次郎の幼馴染みであり、修吾とは進次郎を通して知り合った仲である。

初対面の時に牛井屋でプロテインをかけて食べていたのを見て修吾からは肉彦と呼

ばれている。

「そう言えば昼休みに桐条が来てシユウに告白したってホントか?」

「……………何処でどうネジ曲がってそうなった?」

明彦の発言に修吾は頭を抱えて唸った。

そんな風に乗が広まったら絶対に面倒な事になる……………。

「それについては「はがくれ」で話してやるよ、さっさと行こうぜ?」

進次郎に促されて明彦と机でだれていた修吾ら立ち上がって教室を出た。

ラーメン「はがくれ」

「なるほどな、そんな事があつた訳か…」

進次郎から話を聞いた明彦はラーメンを啜りながら呟いた。

(尚、明彦のトロ肉醤油ラーメンにはプロテインが入っている)



修吾は修吾で無言でラーメンを啜っている……時おり、顔を険しくしているが。

「ま、シユウが面倒事に巻き込まれるなんてのはしよっちゅうだけだよ」

進次郎もそのままラーメンを啜り、満足そうにしている。

「……………」

「つか、どうしたシユウ？はがくれ来てから無言じゃねえか」

「そうだぞ？いつもなら旨そうに食ってるだろ？」

オーダーする以外、ずっと黙っていた修吾に流石の進次郎と明彦も気になった。

「……………入り口、見てみ？」

「?!」

言葉少なめに告げた修吾の一言に頭に疑問符を浮かべながら言われた通り、入り口を見た二人は……………。

「ぶふうっ！」

「うわっ！キタネツ！」

口に含んだラーメンを吹き出しそうになっていた。

修吾は修吾で危うく服にかかりそうだったが……………。

二人が見たものは、はがくれの前の入り口に立ち物凄い形相で修吾を見ている「桐条美鶴」の姿だった。

「お、おいっ!?!なんだありやつ!」

「恐らく教室出たときに付けられてたかな、あの様子だと……………」

「周りの人たちも引いて避けてるぞ?!……………流石に恐ろしいぞ、あれは」

3人とも口々に恐怖を語っているが、あれじゃはがくれにも迷惑がかかるし気に入つた店の出禁もあり得るかもしれない……………。

「……………ちよつと逝つてくる」

「……………まあ骨は拾つてやる」

「無事に帰つてこい……………」

友人二人のありがたい激励を背に外に出た修吾。

「なあ、シンジ?」

「あん?なんだ、アキ?」

「あれつて俗に言うストーカーか?」

「……………」

「……………」

「(シユウのやつ、無事に戻れるのか?)(二)」

その頃、はがくれを出た修吾はと言うと……………。

「……………」

「あ、いやあ……………」

無言で見えてくる桐条相手にシドロモドロになっていた。

「……………君は……………」

「うえ？」

なにかを言い始めた桐条に修吾は間の抜けた返事しか出来なかった。

「君は、私と話すより彼等との食事を優先するのか……………」

「うつ……………ああ、いや、そのお……………」

（流石にその通りです！とは言えない……………）

何せ若干涙目で此方を見るものだから何か居たたまれない気持ちになるのである。

「折角……………適応者が見つかったと思つたのに……………」

「適応者?……………あの時間のことか」

「!？」

修吾の発言に目を見開いて驚いた桐条は意を決して修吾に言いはなつた。

「君は……………一日が二十四時間ではないと言つたら、信じるかい？」

「……………普通なら、信じないだろうな……………だけど、あんな現象を体験しちまつたら何が起こつても驚かないさ」

(一応、知識では知つてるし体感もした……………後は具体的な事情を聞くか)

内心で嘆息し、目で話せと桐条に訴える。

「……………ここじゃ目立つし、場所を変えよう」

そう言つて桐条はその場を離れた。

(目立つのは、お前がストーカー的なことしてたからだと思つるのは俺だけか?)

内心、そんな事を思いつつ修吾は桐条の後を着いていった。

## 第1話　ご令嬢にはご用心？（後）

修吾　side

ストーキングしていた桐条に連れられて今は閑散としてゐる住宅街を歩いていた。

（そういえば、はがくれのラーメン残したまんまだった……勿体ねえ）

桐条の背中を見ながら内心ではがくれのラーメンの事を思っていた。

（ま、肉彦が処理してくれるだろうからいつか……にしても、何で急に桐条が俺のところに来たんだ？）

はがくれの一件で少しパニックだったが、冷静に考えてみると妙だ。

別に桐条とは特に接点はないし、原作を知る身としては関わりにあうのも正直、ごめんだ。

（ふうむ、益々謎だな……別に俺は金〇一少年でも無ければバーローでもないし………ん？）

アレコレ考えていたら桐条が立ち止まって此方を見ていた。

「どうかしたか？……そんな穴が開くほど見られると落ち着かないんだけど」

「つー……………す、すまない……………君が怒ってるんじゃないかと思って……………」

怒る?……………何か怒らせる事でもしたのか、桐条は?

「その、君を監視する真似をしてしまった事だ……………」

「監視……………ああ、あの事か」

恐らく、はがくれの一件の事を言ってるのか。

あれは監視というより凝視のような気もするが、まあそこら辺はいいか

「別に気にしちやいないさ……………恐怖は感じたけど」

「ん?何か言ったか?」

「別に……………それよりも此方からも質問があるんだけ……………」

「それは後で受け付けよう……………着いたぞ」

桐条が立ち止まった場所、そこは一件の寮だった。

マンション程ではないが、それなりに小綺麗なのが外見上わかる。

「こんなところに寮なんてあったか?」

「此処は桐条が所有していたホテルを改装したものだ……………さ、中に入ってくれ」

桐条に促されるまま、俺は寮の中に入った。

## N O s i d e

巖戸台分寮・ラウンジ

桐条に案内された寮を眺めつつ、修吾は内心で感想を呟いた。

「(小綺麗だけど、なんつうか……………ラ〇ホって感じもするよな)」

(実は私もプレイ中に同じことを思いましたby作者)

「どうかしたか?」

桐条が少し挙動不審な修吾を見て疑問に思ったのか、聞いたのだした。

「いや、何でもない……………それより話を聞かせてくれよ?」

修吾は寮内の人間……………恐らく桐条家の人間だろうと踏んでいる……………から出された紅茶を飲みながら桐条に話を促す。

「そうだな……………先ず、君は一日が二十四時間ではないと言ったら信じないかい?」

「……………普通なら信じられないだろうけどな……………あんなモンを体験したらそれも言え

ないだろ」

修吾はおちやらかした様に言い放つと急に雰囲気を変えた。

「お前なら知ってるんだろ、桐条?あの現象が何なのか……………(一応、俺も解るけどな)」

「……………」

誤魔化しは許さないと目で語っている桐条はその威圧感にやや気圧された。

「単刀直入に聞け?この件、桐条家が絡んでるんだろ?」

「なっ!?なぜ……………」

驚く桐条を尻目に紅茶を飲みながら、口元を斜めに動かす。

「……………只の勘、と言いたいがカマかけたつてもある。……………その反応を見ると本当

らしいな」

「……………ああ、君の言う通りだ……………あの影時間は桐条家の負の遺産と言ってもいい」

観念したのか、桐条はポツポツと語り始めた。

桐条の祖父「桐条 鴻悦」が「時をかける神器」を作る為にシャドウと呼ばれる存在を捕らえて実験していたこと。

実験の最中、シャドウが暴走し実験場が崩壊しそのシャドウが巖戸台に開放されてしまい影時間が出現したこと。



そしてその実験場が月光館学園だと言うこと。  
等々……………。

「ふうん……………（知ってはいたが、改めて聞くと恐ろしく重たい話だな）」

「私は、桐条家の人間だ……………こんな事態を招いた責任は取らなければならない」  
話終えた桐条は力なく項垂れていた。

まだ中学生だと言うのにとんでもなく重いものを背負っている。  
それが修吾の思ったことだった。

それと同時に桐条を見て危ういとも……………。

「……………こんなことを頼める立場ではないことは分かっている！だが、この影時間を消せるのは影時間に適応出来る物だけなんだ！」

すると桐条は修吾の目の前に立ち、頭を下げてきた。

その様子から必死な事が窺えた。

「……………本来なら面倒臭い事は御免なんだがな……………」

「っ！」

面倒臭そうに溜め息を吐きつつも、桐条の頭に手を置いて撫でた。

「え……………」

啞然としている桐条に笑みを浮かべて……………

「その勇気に免じて、俺も協力してやるよ……………ま、条件付きでだけどな」

「じ、条件……………とはなんだ？」

修吾の笑みに見惚れて頬を赤らめつつ、条件が何かと聞いた。

それを聞いた修吾は悪戯そうに笑みを浮かべ……………

「はがくれのラーメン奢れ」

そう言いはなつた。

# オリ主設定

氏名 柘 修吾（ひいらぎ しゅうご）

身長 168センチ（中学時代）

体重 64キロ

趣味 食べ歩き 学校の屋上で昼寝 美鶴いじり

特技 特になし（基本、何でも出来る為）

嫌いな物事

面倒臭い事（この一言に尽きる）

備考

転生者にして化け物クラスの能力の持ち主。

自分でも何故こんな能力があるのか知らないが深く考えない様になっている。（面倒臭いから）

前世の知識からペルソナ3の事を知っている為、影時間のことや桐条の事も浅い程度は知ってはいる。

真田明彦、荒垣進次郎とは友人同士であり真田を「肉彦」、荒垣を「ガツキー」と呼んでいる。

ギャグパートではボケ担当であり、ツツコミ担当である荒垣に制裁される事もしばしば。

ただし、天然である明彦や美鶴には突っ込みを入れる場合もある。

使用武器は大型ナイフ。

主にナツクルガード付きのモノを使う。(スプリガンの御神苗優の持つ物と同型)

そこらにある公共物(小さいものから大きなものまで)も戦闘に使用する。

所謂、喧嘩殺法+見様見真似の中国拳法を扱う。

身体能力もさることながら知識も豊富である。(天才ではないが)

生来の面倒臭がりな為、滅多に怒ることはないが本気で怒らせると相手を滅多殴りにして壁に力尽くで埋め込みオブジェにする。

若しくは相手をベコベコに凹ませて精神科に通院させるほどにまで言い負かす。

オマケシナリオ

はがくれ前

修吾は善は急げと言わんばかりに桐条を連れてラーメン屋「はがくれ」の前に来ていた。

「さつきは中途半端で消化不良だったからな、早速行こうか!」

意気揚々とはがくれの入り口の扉に手をかけ…………

「ち、ちよつと待つてくれないかっホントに今日食べるのか!」

……………た時に緊張でガツチガチの桐条からストップがかかり扉から手を離れた。

「何だよ、こういうのは早い方がいいだろ?……………て言うかラーメン屋、初めて?」

「あ、ああ……………こういう所は来たことがなくてな……………ラーメン屋にはテーブルマ

ナーと言うのは無いのか?」

(うわあ、典型的なお嬢様だなあ……………変なことしなきゃいいけど)

「まあマナーと言える訳じゃないけど、旨そうに啜るぐらいかなあ……………」

「そ、そうか……………上手く出来るかな……………」

(ま、なるようになるか……………面倒だし)

そう結論付けてはがくれの中に入っていった。

そして修吾の予想通り、店主の事を「料理長」と言ったり更には店の味の事を聞き出したたり等々、世間知らずの事を言い出した為、修吾は穴があつたら入りたい……………と思つたそうな……………。

## 第2話 レッツ！タルタロス！（前）

no side

はがくれからの帰り途中、修吾と桐条は修吾の住む寮まで歩いていった。

「協力することにはしたが、何すりやいいんだ？」

「シャドウに関してはわからない事が多いんだ……桐条家でも研究してはいるのだが……」

桐条の答えに修吾は面倒臭そうに溜め息を吐いた。

「……要するにシャドウのお掃除って訳か……汚物は消毒だあつ！ヒヤツハアッ！！」

「な、なんだ急にっ!?驚かせるなっ！」

修吾のネタに体をビクつかせ驚いた桐条に文句を言われた修吾。

「どうやら彼女はこのネタを知らないらしい。」

「……まあいい、君の寮まで着いた様だ。また夜に月光館学園で会おう」

「ええ〜……………夜はス〇〇イドの再放送あるから見たいんだけどお……………」

「……………#」

桐条の額に青筋が立っているのが見えた修吾は直ぐ様寮の中に飛び込んでいった……………。

「……………全く、あんないい加減な男に頼んで良かったのだろうか……………それにス〇〇イドとは一体なんだ?」

戻ったら調べてみよう、と思った桐条だった。

### 修吾の住む寮

「おお、おつかねえ〜……………さてと、夜のために準備でもしとくか」

修吾が部屋で準備を行っている時、ドアからノック音が聞こえた。

「う〜い、開いてるぞお〜」



修吾がそう声をかけると、ドアが開きそこから二人組が入ってきた。真田と荒垣である。

「よお、肉彦にガツキー！そんな死人見た様な顔してどうした？」

「シュウツ！生きてたのか」

「開口一番に失礼過ぎるぞ、肉彦……………」

何処と無く○装○神の緑髪の彼に聞こえろと思つた修吾だった。

「んで？桐条となに話してたんだ？大方、あの現象の事だろ」

「流石ガツキー！わかつてらっしやる♪」

ガツキーって言うなと頭を軽く小突かれる修吾。

この3人の中でも彼は苦労人の様だ。

「結局、あの現象って何なんだ？」

真田が疑問に思つたことを口にした。

荒垣もそう思っているのか、修吾を見つめる。

「……………野郎に見られても嬉しくないんだけど……………」

「いいからとつとと話せよ、俺もあんな訳のわからねえ現象が気になってしょうがねえんだよ」

「分かつた分かつた……………全部話してやるから」

それから修吾は影時間の事を話始めた。

影時間、桐条家の負の遺産、シャドウ、シャドウに対抗出来るのは影時間に適応する人間だけだと……………。

自分はそれに協力することにした事……………。

余すことなく修吾は明かした。

「……………影時間……………存在する筈の無い裏の時間、か」

「中々、面白そうじゃないか!俺も連れてけよシユウ!」

荒垣はポツリと漏らし、真田は逆に熱中出来る事を見つけたみたい嬉しそうである。

「まあ既に経験してるし、別に連れてくのは俺的には構わないんだけど……」

修吾は一息吐いて霧囲気を真面目なものに変えて二人を見やった。

「わかつてるか、明彦？……下手すりゃ死ぬんだぜ？面白そうとかの理由で死ぬとかになつたら笑い話にもなりやしねえよ？」

「つー……だが逆に言えばその分強くなれるんだろう？だつたら俺はやるさー」

修吾は真田に凄む様に言い放つと若干気圧された様に詰まるが、直ぐ様言い返してき  
た。

両者共にそのまま無言で互いを見続けるが、不意にパンつと手を叩く音が部屋に響い  
た。

「そこまでにしとけ、お前ら」

荒垣である。

二人の霧囲気が只ならなかったのを見抜き、自身が介入する事でその空気を霧散させ  
たのである。

「シンジ……」

「アキ、てめえが過去の事を引きづつてるのは分かる……力に執着してるのもそのせ  
いだろ」

「……………」

真田は荒垣の言ったことに無言になった。

それは荒垣の言う事が事実だと言うことを肯定していた。

「シユウ、俺もてめえに聞きてえんだが……てめえの闘う理由ってのはなんだ？」

荒垣は修吾を睨み、自身の理由を問いかけた。

誤魔化しは許さない、荒垣の眼は修吾に対してそう言っている。

「……俺も、正直な所何と言えばいいか分からねえ……だけどさ、あの女傑って言われてる桐条が頭下げて頼って来てるんだぜ？あんな風に頼まれちゃ嫌とは言えねえって……」

修吾は徐に立ち上がり、冷蔵庫を開けて缶コーヒーを3本取り出し、内一本を開けた。

「それに俺自身、面倒臭がりなんだ……面倒な影時間を消し飛ばして悠悠々自適な生活を送りたいのよ？」

「後半が本音だろ、テメエの場合は……まあ言いたいことはよく分かった」

投げ渡された缶コーヒーを開けて、そのまま煽りながら荒垣は二人を見やった。

「……俺も行く。」

「……話聞いてたか？死ぬかも……大体、テメエら二人が暴走したら誰が止めるってんだ？」

「……おっしやるとおりでございませす」

修吾と真田は荒垣に対して平伏した。

「どうやらこの二人は荒垣に頭が上がらないらしい。」

「ま、まあ行くなら準備してからにしよう……桐条には俺から言うからよ」

「わかった」

空気を変えようと修吾が発言すると二人は頷いて部屋を出た。

「……………まあ連れがいるのは正直、ありがたいしな、アイツら強いし」

修吾は呟いて愛用しているシヨルダーバッグに必要なものを詰め込んだ。

「……………一応、こいつも持つてくか」

## 第2話 レッツ!タルタロス!(中)

午後9時

巖戸台分寮

桐条 side

「終 修吾か……………」

私は自室で桐条家で調査した彼のデータを見ていた。

資料を見た感じでは成績優秀だが素行にやや問題あり。

本人は面倒臭がりりで友人である真田明彦、荒垣真次郎と共にいることが多い。

よく駅前商店街にすることが多く、街では有名とのこと。

裏路地にいた柄の悪い不良を荒垣と二人で殲滅させた等、身体能力は高い様子。

「……………しかし、話してみるといい加減な男ではあるが……………」

私はふと、彼に頭を撫でられた時の事を思い出していた。

あの時はただ、戯れに撫でただけだと思ったが今思えば少し、お父様に似ていた様な

気がした……………!

「つ！……な、何を考えているんだ私はっ!? あんな男をお父様と一緒にするなんて……！」

私は熱くなつた顔や頭を冷ますために屋上に出た。

外を眺めるとまだ人がいるため、外は街灯が点いているため明るい……。

影時間が始まるまで、後3時間か。

桐条家の負の遺産……。

影時間……。

シャドウ……。

「必ず、必ず消してみせる！」

外を眺めながら私は静かに決意した……。

no side

午後11時 コンビニエンスストア前

「やっぱガツキーの作る飯はうめえなあ」

「別にお握り位、普通に作れんだろ」

修吾と荒垣は私服のまま、コンビニエンスストアの入り口前でお握りを食べていた。準備が完了して時間まで適当に時間を潰していたのである。

「しかし、アキの奴あ何でもプロテインかけて食わなきゃ気が済まねえのか、アイツは」  
「その内、渾名がプロテインジャンキーになるんじゃないか?」

「現時点でそうなってんだろ……」

修吾は何年か後の真田を想像して笑い、荒垣は頭に手を置いて顔をしかめた。

真田はプロテインが切れたとの理由で今現在、寮まで戻っていったのである。

「にしてもガツキー?……そんなもん、何処で手に入れたん?」

修吾は荒垣の持つモノに対して興味を示した。

ゴルフバック程の大きさのバックは何故か妙な威圧感を感じたからである。

修吾は中のモノを見て若干顔をひきつらせたのはつい先程の事である。

「まあ、ある伝手を頼つてな……。テメエに比べたら大した事ねえよ」

「ハツハツハツ……。ちよつと裏路地の方々から強……。譲り受けただけだよ」



「…………アキもアキだが、テメエ程ぶつ飛んでる奴もいねえだろうな」

目をそらして笑う修吾に荒垣ははあ、と溜め息を吐いた。

と、そこへ…………

「ハアツハアツハアツ…………ま、待たせた」

真田が走つて二人に近付いてきた。

真田の手にはバツクが握られていた。

「あゝ…………着いて早々だけど、もう行くぞ？肉彦」

「なにつ!?まだシンジの飯を食べてないぞ、俺は！」

「テメエがわざわざ寮に戻るのが悪いんだろ、アキ」

そんなやり取りをしつつ、3人は合流場所である月光館学園へと歩を進めた。

午後11時50分

月光館学園前

3人が月光館学園の前に来たとき、既に桐条は校門の前で腕を組んで待っていた。

「……………アマゾネスがいるぞ!肉彦、ガツキー!」

「確かに……………」

「誰がアマゾネスだ、柗っ!?それとその二人は何故ここにいるっ!」

小声でポソリと呟いた修吾を桐条は聞き逃さなかったようだ。

そして修吾の後ろにいる真田と荒垣に何故いるのか問いかけた。

「ああ、この二人は助っ人だ……………ちゃんと影時間にも適応してる」

「なっ!?この二人もなのか……………」

桐条は修吾の他に適合者がいたことに驚いていた。

まさか修吾の他にも適合者がいるとは思わなかったのだろう、桐条の顔が驚愕と喜色  
の入り交じった表情をしている。

「写メ写メ……………」

パシャリツと懐から携帯電話を取り出し、桐条の表情を撮影した。

「待てっ!何を撮ったっ!」

「いやあ、桐条のファンって結構いるからなあ……………伝手に頼んで回して貰おうかと  
思っって」

「なっ!?や、止めろ馬鹿者っ!!」

やいのやいのと修吾と桐条が騒ぎ立てる中……………。

「なあ、シンジ?俺達って……………」

「言うな、アキ……………っ!?シユウツ!!」

蚊帳の外な真田と荒垣がポツリと溢した時、回りの景色が変わった。

景色は色落ち、月の光のみが不気味に輝いていた。

「これが、影時間か……」

「ああ……………そしてこれが私達、桐条家の負の遺産だ」

影時間に入ったとたん、地響きが起き目の前にあった月光館学園が姿を変えていく。

「なんだなんだっ!?トランスフォームでもするのかっ!?」

「空気読め、シユウ……………」

修吾の空気の読まないボケに荒垣が頭を小突いてツツコミを入れている間に月光館学園は一件の長大な塔へと変貌を遂げた。

「これが、タルタロスだ……………」

「……………タルタロス……………奈落の門、か……………」

## 第2話 レッツ!タルタロス!(下)

午前0時 月光館学園前・タルタロス

修吾 side

俺達4人の前に現れたタルタロス。

その禍々しい塔は天高く聳(そび)えており、見るもの全てに恐怖を与える……………そんなイメージを抱かせた……………。

「月光館学園が……………どうなってるんだ!?!」

明彦が混乱したかのように叫んだ。

その気持ちはわからないでもない……………。

俺だつて原作知識が無かつたらわめき散らしていただろうから。

「これが月光館学園なんだ……………。そして、桐条家の負の遺産でもある」

桐条はタルタロスを見ながら明彦にそう言った。

知識で知ると実際に見るのとじゃ全く違うと言うのは、本当だな。

「どうする? 中に入るか?」

「……………本音言えば帰って寝たいとこなんだけどなあ……………」

真次郎が俺達に向き直り、中に入るか聞いてきた。

明彦に関しては既にやる気十分で持っていたバックからグローブを取り出して填めた。

桐条も手に持っていたフェンシングで使われる細身の剣・レイピアを振った。

「……………はあ、しゃあねえか」

溜め息を吐きながらも真次郎もゴルフバックから手斧を出した。

刃が所々溢れているが、殺傷力に関しては高いだろう。

「ま、行くなら行くでとつとつと行くか」

俺もバックから大型のナイフを出し、腰に填めた。

実は俺の靴のかかとは更にナイフが仕込まれているため肉弾戦でも効果が期待できる。

「よし、行くぞっ!!」

『おうっ!!』

こうして俺達はタルタロス内部に潜り込んだ。

タルタロス・エントランス

no side

修吾たちがタルタロス内に入ると、大きな階段にその先に大きな扉があり、その脇には置時計が置かれている。

入り口付近にはジュークボックスの様な機械があつた。

「しかし、無駄にただっ広いなあ………こんだけ広いと何かいろいろなものも置けそうだ」

「ああ、トレーニング器具とか持ち込んでみるか!」

「デメエらちつたあ緊張感持てよ………」

「……………」

修吾と真田は呑気なことを言つて荒垣を呆れさせた。

桐条は無言で中を調べている。

「……………んん？」

「どうかしたか、シユウ？」

その時、修吾はなにかに気づき入り口の方を見た。

真田は修吾の様子が気になり、同じ方向を見た。

「誰か……………いや、何かいるぞ？入り口の所に」

「っー！」

「何を言っているんだ？さっき入り口には……………」

それを聞き、真田と荒垣は直ぐに戦闘態勢に入るが桐条はそんな修吾の言うことに半信半疑のようだ。

「桐条、こういう時のシユウの勘はよく当たるんだ……………」

「ああ、それも嫌って程になっ！」

何を、と桐条が言う前にドガアツと入り口の方から響いた。

そこにいたのは黒いナニかだった。

わらわらと集まり、分裂していく。

その数、30!!

「くっ! シャドウだどっ!? か、数が多すぎるっ!!」

「ふっ……………面白くなってきた!」

桐条はシャドウの数に気圧されつつもレイピアを構え、真田は不適な笑みを浮かべファイティングポーズをとった。

「……………あんのバトルジャンキーめ」

「ハッハッハッ……………ま、色々とあつたし溜まってたんじゃん? それに……………!」

修吾はそのまま後ろ回し蹴りをし、襲ってきたシャドウを吹き飛ばし、シャドウをそのまま霧散させた。

「憂さ晴らしにはちょうどいいでしょ!」

「そのストレスの元のテメエらが言うな……………まあ一理あるか、オラアツ!!」  
荒垣は手に持つ斧で横風ぎに振るい、シャドウを霧散させる。

そしてそのままの勢いで斧を振り降ろした。

「ワアオツ! 豪快♪っとおいしょおっ!!」

茶化しつつ、ナイフで横薙ぎに振るいシャドウを殲滅していく修吾。

「つとーあいつらは!?!」



修吾はそのまま振り向き様、真田と桐条の様子を見るが…………。

「フンツッ！フンツッ！フンツッ！フンツッ！フンツッ！」

真田はそのままシャドウ達を殴って霧散させていた。

その表情はまだまだ来い、と語っている。

「……………流石プロテインジャンキー（笑）っと、桐条は……………やばっ!!」

桐条の方を見ると、シャドウの数の多さに疲労しているのか反応が鈍くなっており、背後から襲ってくるシャドウに気付かないままである。

「桐条っ！後ろだっ!!」

「はっ!!ぐっ!!」

修吾の声に後ろを向くも、レイピアを叩き落とされてしまった。

「くっ!……………ペルソっ」

距離を離れ、腰に着いていた拳銃を抜き、米神に当てようとする桐条だが…………。

「あぐっ!……………くっ!……………し、召喚器が！」

拳銃をシャドウの触手に叩き落とされてしまい、カラカラと修吾の方に転がってきた。

「くっ!……………待てよ、さつき桐条は何を……………ちいっ!」

襲いかかってくるシャドウに殴り飛ばしつつも桐条の拳銃を拾い上げ、修吾は米神に

当てた。

「俺に出来るのか…………いや、考えてる余裕はないっ!…………行くぜえっ!!…………ペ  
ルソナアツ!!」

そのままトリガーを引くと、バキンッ!と何かが割れる音が響き渡った。  
そして……………

「シユウツ!!」

「くっ……………ひ、柀……………!君は」

修吾の背後に現れたナニか……………。

愛の文字が入った兜に白い陣羽織の下に鎧を着こんだ武者が現れた。

「これが……………俺のペルソナ……………」

修吾は自分の中から現れた武者を見て呆然としていた。

まさか自分に出るとは思わなかったからである。

「まあいい、呆けるのは後だ！……肉彦、ガツキー！桐条！さっさと終わらせるぜ？」  
「っ！あ、ああっ!!」

「つたく、心配かけさせやがって……！」

「わ、わかった……（何故彼がペルソナ能力の事を知っているんだ……後で問い詰めるか）」

修吾のペルソナ召喚で3人は半ば呆けていたが、修吾の一喝で気を取り直してシャドウに向き直る。

「カネツグ、『ガル』っ！」

修吾のペルソナ『カネツグ』が風を発生させシャドウの1体を霧散させ、その隙に修吾が別のシャドウを斬り伏せ蹴り飛ばす。

「最後の1体位は派手にいかないとなあっ……肉彦っ！そっち行つたぜ？」  
「任せろっ！ダアアアッ!!」

その蹴り飛ばされたシャドウは真田の方まで吹っ飛び、真田の全力パンチでまた吹っ飛び……！

「アキッ！」

「チッ！行けオラアッ!!」

荒垣の方に飛んだシャドウは荒垣の斧のフルスイングで最期にエントランスの天井

まで吹っ飛び……………

「ホームランツ!!!」

そして天井にぶつかり、霧散した。

「イエーイ♪」

「ああ、お疲れ!」

パアンと修吾と真田がハイタッチし、

「ガッキー♪」

「あん?……………ああ」

荒垣はそっぽを向きながらも手を出し、そのままハイタッチをする。

「桐条♪」

「あ、ああ……………」

桐条は戸惑いながらも手を出し、ハイタッチする。

「ハツハツハツ……………じゃ、俺は疲れたから寝る……………」

「「シユウツ (終つ) !!」」

笑いながらそのままバタンツと倒れた修吾に3人が駆け寄った……………。

修吾が倒れたことにより、3人の紹介もうやむやになってしまいまた後日、紹介することになった。

## 第3話 夢の中でのアクシデント

no side

巖戸台病院・病室

「……………」

修吾が倒れた後、暫くしてから影時間が終了し修吾はそのまま病院に搬送された。

診断の結果、過労との事で2、3日入院する事が決まった。

桐条、真田、荒垣の3人は修吾の病室に集まり桐条から事情を聞くことになった……………」

(余談ではあるが、修吾の身体を診断した医師は修吾を解剖するとか言っていたが、桐条の『処刑』により)

「しかし出鱈目の塊のシユウが過労で倒れるとはな……………ペルソナって言うのはそこま  
で消耗する程なのか？」

缶コーヒを片手に真田が桐条に疑問をぶつけた。

今現在、修吾は静かに寝息を立てて眠っている。

「いや、本来ならそこまで消耗するわけではない……………恐らく柊は初めてペルソナを召喚した影響と今までの戦闘もあって倒れたんだろう」

桐条は自分の考えを二人に伝え、眠っている修吾を見た。

「それよりも君達は何者だ？何故、柊と一緒にいた？それに、影時間にも適合している事にも疑問がある……………」

「まあ待て……………それに關しては俺から説明してやるよ」

「す、すまない……………少し焦っていたようだ」

桐条の捲し立てる様な質問の嵐に今まで事の経緯を黙って聞いていた荒垣が待ったをかけた。

桐条もそれを聞き、自分の現状を知り冷静になれた様だ。

「まずは俺達の事だが……………」

一息入れ、荒垣は桐条に自分達の事情を話始めた……………。

修吾 side

俺?????は今、ゆらゆらと揺れながら漂っていた。

どこを見ても水色の景色で水の中にいる様な感じだ……………。

「つか、何処だ(こ)こ?」

あん時は確か、無駄に多かったシャドウと戦闘(遊んで)して桐条助ける為にペルソナ召喚してから……………。

「何だ、夢か……………寝よ」

「夢の中で寝るってどんだけ寝たがりだ、お前は」

目をつぶって寝ようとした矢先に急に何処からか声が響いた。

仕方なく目を開けるとそこにいたのは見た覚えのない、白いスーツを着て俺を見下ろしてるやつだった。

「つか、誰あんた?人様の夢に無断で侵入とか……………訴えんぞコラ」

「夢に不法侵入も糞もあるかつ!!」

やれやれ、直ぐにキレるとかゆとりだなあ……………。

「怒らせてるのはお前だろうが……………まあいい、俺はお前をあの世界に送った奴だよ」

「……………」

「そんな頭のおかしい奴みたいに見えるな……………興奮するだろうが」

ただのド変態じゃん……………。

「まあ冗談はさておき、俺はアポロンと言うものだ」

アポロン……………確か、ギリシャ神話の神様だっけか？

「そんで？そのアポロン様が俺みたいな人間をあの世界に送り込んで、何がしたいんだ？」

「お前、神を前にしてよく平然と出来るな……………まあそつちの方が俺も楽でいいがな」

アポロンは咳払いをして、真面目な雰囲気醸し出した。

「……………お前は一度死んだ、これは分かるな？……………そのお前を悪戯に力を付与させて転生させたのは俺の親父だ」

「とんだアグレッシブな親父さんだな、只の一人間の俺に御大層な力を付与させて転生させるとはね」

別に最強オリ主とかなんぞになるつもりは無かったんだがな……………。

こんな力がついてる以上はそうも言っちゃられないか

「全く、我が父親ながらやることなすこと迷惑以外の何者でもないな……………お前には申し訳なく思うよ」



息子の方がまともって……神様の世界、大丈夫かって思うのは俺だけなのか？

「まあ、神様なら俺を普通の人間に戻せるんだろうけど……そいつはもうちよつと待つてくれや」

「何故か、理由を聞いてもいいか？」

……あんま話したくないんだけど、まあアポロンならいいか

「やるこゝとが出来ちまったからな……それが終わるまでは……」

「……あの桐条美鶴という少女の為か？」

俺はそれに対して苦笑という形で返した。

間違っではないからな……。

「……わかった……だが、あの召喚法はお前には向かないな……あれは無理矢理もう一人の自分を引き出すから心に負担がかかりすぎる」

「まあド頭に銃突き付けて引き金引くからなあ……あん時は無意識だったけど、今思えばゾツとするわ」

他に何か無いかなあ……と、思案しているときにアポロンが言い出した。

「なら先の時代の方法を取ればいいんじゃないか……」

「先の時代って……P4の召喚方法の事か？」

あれは確か、タロットカードを思い浮かべるんだっけか？

……………やってみるか……………

カツ!!

「こいつ！カネツグ!!」

すると俺の目の前に蒼く透き通ったタロットカードが現れ、俺はそれを徐に殴り壊した。

殴り壊したカードから鎧武者『カネツグ』が現れ、俺の前に鎮座していた。

「……………意外とやれば出来るもんだなあ……………それに、負担も軽いし」

『……………』

「ん？どうした、カネツグ？」

鎮座していたカネツグから何かを差し出された。

黒い、鉱石の様な物だけどそれでいて粘土のように柔らかい何かだった。

「何だこれ？……………つてオイッ！」

「これは……………まさか、賢者の石かつ!？」

手に持っていた鉱石をアポロンからぶんどられた。

しかも何かレアアイテムっぽい？

「何だその賢者の石って？使えばHPでも回復するのか？」

「ゲームじゃないんだ、そんな効果あるわけないだろ……………いや、ある意味で恐ろしいかもしれないぞ」

アポロンの目がギラついていたので話を聞こうにも聞けない為、仕方なく諦めることにした。

「それよりお前……………そろそろ目を覚ました方がいいんじゃないか？」

「どうゆうことよ？」

「ああ、時間の流れが違うから忘れてたが……………もう3日経ってるぞ」

「……………先に言えよ、そういうことはあああああつ!!」

アポロンがあっけらかんと言った瞬間、俺の身体が急に浮上して物凄い勢いで上っていった。

「さて、あいつも行ったことだし早速戻ってこいつを精製するか！」

愉しそうに笑みを浮かべながらアポロンはそのまま露となって消えていった。

主人公のペルソナ設定・オマケ

雷	氷	火	貫	打	斬	運	速	耐	魔	力	悪	魔	アル	n	a	m	e
弱			弱	無	耐	5	8	7	7	9			カ	ネ	ツ	グ	

風耐

光

闇

skill

ガル

スラツシユ

スクカジヤ

備????????

タルタロス・エントランスでのシャドウとの戦闘で発現した終

修吾のペルソナ。

モデルは戦国の武将『直江兼続』

素早い剣術と風の魔法を得意とする。

力も強く物理の耐性は高いがジオ系、貫通には弱い。

カネツグ自身にも何らかの意思があるような行動も見受けられる。

召喚法が特殊であり、目の前にカードを出現させてそのカードを殴り壊してカネツグ

を出現させる。

おまけシナリオ 長鳴神社の白い守神

巖戸台にある小さな神社。

古びた外観から見ても、歴史のある神社だ。

その古びた神社に一頭の白い犬がいた。

『クウン……………』

欠伸をしているその犬の名前は『コロマル』。

漢字で書くと「虎狼丸」である。

コロマルはすすんすと鼻を動かし、匂いを嗅いだ。

ふとしたことで知り合った人間の匂いがしたからだ。

「よお、コロマル♪」

『ワンツ!!』

現れた人間にコロマルは尻尾を振って近付いた。

その人間は月光館学園の制服を着ており、鞆を手に持った少年だった。

「おおぅ………今日もいい毛並みしてるよなあ、お前」

「ワンワンツ♪」

自分の毛を褒められてより尻尾を振るコロマル。

どうやら嬉しいようだ。

『フンフン……フンフン……ワンツ!!』

「今日はお前にお土産持ってきたぞ?」

コロマルは傍に置かれた少年の鞆から香ばしい匂いがしたので目を輝かせて吠えた。

「ほれ、ビーフジャーキーだぞお♪」

少年は鞆の中からビーフジャーキーを出してコロマルの前に差し出した。

『ワンワンツ♪ワンワンツ♪』

コロマルは嬉しそうにビーフジャーキーにかじりついた。

少年もその様子を見て自然と笑みを浮かべた。

それから少年はコロマルと会話したり、持っていたボールで遊んだり等して時間を潰した。

「おっと、そろそろ夕方か……そろそろ帰るかな」

『クウン……………』

少年は腕時計を見て、夕方になる頃合いを見てコロマルに告げた。

それを聞いたコロマルは寂しそうに鳴いた。

「大丈夫だよ、また直ぐに会えるだろうしな？」

少年は笑みを浮かべ、コロマルの頭を撫でてそのままコロマルの手を振り、階段を下りていった。

コロマルは少年の背中をずっと見つめたまま動かなかった。



そしてコロマルは少年の言うとおり、少年は青年となって出会うこととなる。  
それも意外な形で……。

## 第4話 修吾の目覚め

no side

月光館学園中等部校舎・屋上

「……………はあ」

学生が授業中の中、修吾は一人屋上で寝そべって空を見ていた。

その顔は普段の眠そうな様子はなく、悩みを抱えているというのがありありと現れている。

「……………より面倒な事になってきたなあ……………」

修吾が面倒臭そうに溜め息をつき、病院での出来事を思い出す。

修吾が目を覚まして少しした後、桐条、真田、荒垣から今後の事を説明された。

数日前 巖戸台病院・病室

「……………おっす」

「「柎（シユウツ!!）!!」」

修吾が倒れてから3日後、漸く修吾が目を覚ました。

見舞いに来ていた3人は修吾が目を覚ましたのを見て驚いている。

「柎、身体は大丈夫なのかっ!？」

「全然、元気だよ桐条」

詰め寄ってきた桐条に腕を回すことで元気であることをアピールする修吾。

顔色も元気であることを証明していた。

「やれやれ、余り心配かけるなシユウ」

「いやあ、悪いね肉彦♪」

「だから肉彦って言うな!」

修吾の何時もの様子に突っ込みつつも安堵している真田。

修吾も修吾で真田を何時ものように肉彦呼ばわりしていた。

「つたく!俺らに心配かけたんだ、何か奢って貰うぜ、シユウ?」

「へいへい、はがくれ丼にトンコツ醤油でいいか?」

荒垣も安堵しつつ、はぐくれの隠しメニューと今人気のメニューを催促し、修吾もそれを苦笑いしつつ容認した。

「あつ！なら俺は海牛の特盛汁でくでな？」

「わかったわかった、プロテイン増し増しでな♪」

普通はプロテインは混ぜないが、それが真田クオリティ（笑）

「ならば私はフランス料理にしておこうか」

「……………高級料理は勘弁して下さい」

桐条がさらつとフランス料理と言った所で修吾がベッドの上で土下座したところで3人から笑いが起きた。

「……………取り敢えず俺が寝てる間に何があったのか、教えてくれよ」

一頻り笑いが収まった後、取って付けたように咳払いをして状況を聞く修吾。

3人もそれを察して雰囲気直し、修吾に事情を話した。

「まず、タルタロスの探索だが……………彼処までシャドウがいるとは思わなかった……………そこは私達の調査不足だった」

桐条が申し訳なさそうに頭を下げる。

恐らく、真田と荒垣は散々そこをせつついたのだろう……。

頭を下げてゐる桐条から哀愁のような物が漂つていた。

「まあ、次にこんなこと無けりや俺から言うことはないよ……次は？」

「ああ、俺とアキだが……今の寮から桐条のいる分寮に移ることにした」  
桐条から視線を外して荒垣を見た修吾は荒垣に話を促した。

寮を移る理由も修吾には想像がついていた。

「……………不足の事態の為に纏まつて動けた方がいいからか？」

「まあ、そういうこと……それから……」

「ああ、俺達もペルソナ使いになつた」

荒垣は一旦話を切り、真田を見てから懐から召喚器を取り出した。

(まあ肉彦の場合は考えられないが、ガツキーはなんで?)

そんな疑問が顔に出ていたのか、荒垣は半眼になつて答えた。

「テメエ等、特にアキだが……余計に無茶なマネするからだろうが」

「いや、何かスマン……」

「おい、それはどういう意味だシンジツ!？」

そうやって言う荒垣から苦労人のオーラが漂つていた。

何せ修吾のボケと真田の暴走に一番苦勞しているのは彼なのだから……………。

それを聞いて修吾は何だか申し訳なきそうにし、真田に関しては余り自覚がないようである。

「まあ肉彦と桐条つてドが付く位の天然だしねえ」

「テメエの場合は狙つてやるからよりタチがわりいんだよ、シユウ」

他人事みたいに言う修吾に頭をひっぱたいて突つ込む荒垣だった。

「俺の何処が天然だつて言うんだっ!？」

「天然とは一体何の事だ？」

「……………自覚なし、か……………大変だ、こりゃ」

「はあ……………頭痛え」

最早、荒垣は苦勞人確定のようだ。

いつか胃薬を常備持ち歩くことになりそうな未来が来るかもしれない……………。

「ま、まあそれはいいとしてだ……………終、君も寮に来るか？」

「あの分寮だろ?……………面白そうだし俺も行くよ」

桐条は修吾に寮への移りを薦め、修吾はそれに嬉々として応えた。

(それに学校からも近いしな)

「(あの感じは間違いないかそう思ってるな)」

修吾にとっては此方が主な理由なのだが、付き合いの長い真田と明彦は修吾の考えている事を理解し、それを桐条が知ることはない……………。

回想終了……………

「よく考えりや、あの堅物の桐条と同じ寮って事は学校サボれないって事じゃん！あく！失敗したあ」

今更ながら修吾は寮を移る事を後悔した。

それも割とどうでもいい理由で。

そんな修吾の背後に……………

「ほお、君は学校をサボる気だったわけか……………」

「っ!？」

冷たい冷たい殺気の様なものど妙に威圧感を醸し出している聞き覚えのある声に修吾は冷や汗がダラダラと流れ出ているのを感じた。

「それも私のいる寮でそれをするとはなかなかいい度胸だ、柊……………」

声は更に威圧感を増し、修吾のすぐそばまで近づいていた。

「ア、アハハハハ……………な、何でここに……………」

修吾は辛うじて声を出すことに成功したが、発する声自体が震えている。

「フフフ……………君一人を探す事ぐらい、桐条財閥を使えば……………」

「いや、人一人探すのに自分の家の力を使うな……………ヒイツ!？」

桐条の発言に思わず突っ込みを入れ振り返ったが、桐条の顔を見てひきつった声を出して後ろに引いてしまった。

「フフフ……………どうしたんだ、柊?後ろに下がると危ないぞ?」

「あ……………ああああ……………」

目のハイライトが消え、不気味な笑みを浮かべて修吾に近づいていた。

「さあ、行こうか?授業の最中なんだ……………サボリハユルサンゾ?」

「イ、イエスツ! マムツ!!」

逆らうと命はない……………本能的に判断した修吾にはそう返事をするしか道は残されていない……………。